**相槌神社**

相槌神社は、男山のふもと、石清水八幡宮に続く参道の入口にあります。平安時代（794～1185年）後期には、有名な刀鍛冶である五郎太夫安綱と三条宗近が、相槌神社の隣にある井戸の水を使って刃を鍛造したと言われています。その中で最も有名なのは髭切と膝丸で、この2本の刀は、歴史を通じて多くの英雄的戦士を生み出した源氏の宝物と見なされています。神社の伝説では、商業と農業の神である稲荷が、五郎太夫安綱の刃の鍛造を助けるため現れたとされています。

刀が無事に完成した後しばらくして、この稲荷を祀るため、井戸の隣に相槌神社が建立されました。その祭壇の両脇には、この神の神聖な使者と見なされている2体のキツネの像が並んでいます。山ノ井（「山の井戸」）または藤木井（「藤の井戸」）と呼ばれる神社の井戸は、江戸時代（1603～1867）に石が敷き詰められました。この井戸は、八幡の5つの由緒ある井戸の中で、今でも水が出ている唯一の井戸です。そしていつ頃かは不明ですが、神社の銘板に刀工の三条宗近についての記載が加えられました。相槌神社は1710年まで石清水八幡宮によって運営されていましたが、その神徳への信仰が非常に強かったことから、近隣住民が独自に資金を集めて神社の修繕を行うようになりました。

髭切と膝丸という、相槌神社に関係のある2本の刀については、依然として多くの憶測がなされています。数多くの古文書によると、それらは長い歴史の中で数回、名前と所有者を変えました。現在では、京都の北野天満宮と大覚寺に保管されている2本の貴重な歴史的な刀は、伝説の髭切と膝丸ではないかと考えられています。両方の刀は国指定重要文化財に指定されています。

相槌神社は訪問者に公開されていますが、毎月1日と15日に定期的に儀式が行われるとき以外は、社務所は無人となっています。詳しくは、相槌神社公式サイト[リンク]をご覧ください。WEBサイトでのお問い合わせは、簡単な英語で受付けています。